バークリ貨幣理論の整理

堀家文吉郎

はじめに……（四一）
一　紛々たる諸評……（四三）
二　整理された断片（一）―貨幣と信用―……（四六）
三　整理された断片（二）―金銀・紙幣・銀行―……（五〇）
四　整理された断片（三）―国立銀行・造幣所・小額貨幣―……（五四）
おわりに……（五七）

はじめに

ジョージ・バークリが匿名で『ザ・キエリスト』（三部）をダブリンで公刊したのは、一七三五年から七年にかけてのことであった。[1] 当時、グレート・ブリテンの国王はジョージ二世、ウォールポールが宰相である。イングランドがスコットランドを合同したのが一七〇七年、アメリカに一三植民地が成立したのが一七三二年であった

ことから、おうよその時代は解るだろう。

全巻が疑問文で貫かれ、それでいて何を言いたいかはその都度直截に読者に伝わる仕掛けになっているこの本の第一部が出たとき、著者は恰度五十歳で、[2] 前年に（十八歳までそこで過した南アイルランド）クロインの監督に任ぜられたところであった。彼は一七三一年までアメリカ（ロードアイランド）で活躍しており、翌三二年二月にロンドンに帰来していたのだが、もともとは十八世紀のアイルランド教会の第一級のスターとして、哲学上でもまた活動的な理想主義者として著名になっていた。[3] じっさい彼はロックとヒュームを繋ぐひととされており、フレーザー編の『全集』（四巻）は殆んど哲学的な著作によって埋められている。例外をなすのは、ここに取上げようとする『ザ・キエリスト』と、もう一篇（『大ブリテン滅亡防止論』一七二一年）があるだけである。そして、一応は重商主義者とされていながら、内容はそれとは一味も二味も異っている。すくなくとも正統とは、この分野では言えないだろう。その様相を具体的に見たい。

（1）[Berkeley, George], *The Querist, Containing Several Queries, Proposed to the Consideration of the Public*, Dublin, 1735—7, pp. 60, 46, 60 は、一七五〇年に三部を一巻にまとめて再版とするときに、著者名がはいった。なお、この本には、川村大膳・肥前栄一の邦訳（訳書名『問いただす人』東京大学出版会・昭和四十六年）があり、初・二版の異同も校合してある。

（2）ジョージ・バークリは、アイルランド生れの英国人、ウィリアムの六人兄弟の長男として、一六八五年三月一二日に生れた。家系その他については、ウィリアムの父が王政復古（一六六〇年）の直後にストラットンのバークリ侯の一行としてこの島に渡来したこと、ウィリアムの妻はアイルランド人で、ケベックの英雄ウォルフの一族と遠縁

にあたるといわれていること位しか解っていない、という。(cf. Fraser, A. C., "George Berkeley" in *The Works of George Berkeley* [4 vols], London, 1901, vol. I. p. xxiii.)

(3) ロードアイランドでの活動と、クロインの監督補任の関係については、cf. Fraser, *ibid.*, p. lxxi.

一　紛々たる諸評

『ザ・キエリスト』について、マカロックは、この本に書いてあることは簡潔かつ正確で、ある部分は最も行届いた叙述になっており、著しく勤勉と節約の利益を説いている。けれども、いろいろと重大な誤りもある。そのうち最も顕著なのは、富が贅沢禁止法の扶けと、奢侈品の禁止によって増大させうるであろうとしていることである、と言っている。(1)

ポールグレイヴの『経済学辞典』に、バークリについて書いたのはエッジワースである。彼はこの本のことを、アダム・スミスに先行し、重商主義の誤りを免れている。例えば、利子は土地の価値を測ると言っていることなど、幾つかの技術的な点では傑れており、また、悪貨は良貨を駆逐するとも述べている。けれども、二、三の説は不確かであるか、あるいは疑わしい。カンティロンと同様に「非生産的消費のゆくえが、いつも重要」という点、また、第二版より、第一版により詳しいが、そこに述べられている国立銀行設立案も、怪しい。さらに、右の二つよりも重大ではないけれども、「国民の質が大切」とも言っている。これも如何なものであろうか、と評している。(2)

『英国伝記辞典』(簡約版)は、この本の出版を、「貨幣について書く」とだけ記している。(3) 書名すら載せない

のは、重要さを認めないからかも知れない。しかし、シュンペータは、バークリの経済分析への貢献は、哲学へのそれとは比較にならない位に小さい。それは主に『ザ・キエリスト』に含まれているが、退屈な質問の果しない連続により、長々しい議論を述べるというアイデアは、誰の好みにも合わないだろう。しかし、彼の哲学的思考の長所であるところの力強い常識は、ほとんど誰にも異彩を放つものと見えただろう、と言っている。(4)

簡潔かつ正確といわれるかと思うと、退屈な質問の連続と言われる。重商主義の誤りを免れたはずの本が、イギリス重商主義経済学説史上に独自の地位を占める(5)とされている。つまり、見るひとによって捉えどころが極めて違ってくる本なのである。このようにこの本が多面性をもっていることは、わが国におけるこの本の理解をも統一的なものとしていないようである。マンドヴィルの影響を鋭く指摘する立場もあるが、(6)他方で節約の利益を著しく説いているとは、無論言えそうである。だが、矛盾するかに見えるこれらの理解は、どこかに視座を据えれば、一人のひとが書いたものであるからには、まとまった一体のものとして見透しがつくはずであろう。

そうした地点を捜すべくこれから探索に出掛けることにする。その際差当り、私は貨幣という、この一つの事物にだけ注目する。目移りがすると頭が混乱するからである。ちょうど展覧会に、静物だけを見ようとして出向いたり、博物館に壺だけ見にいくようなものだが、これは鑑賞者の一つの方法というか態度であって、当然許されて良いものだと思う。

引用のテキストとしてはフレーザー版の『全集』に収載のもの(7)を用いる。即ち再版（一七五〇年版）の復刻を利用する。理由は、もと一―三部に別々についていた質問番号が、この版では通し番号となっていて、引照に当って間違いが起らないだろうからである。邦訳版の扱いかた、つまり、原著の初版を土台として、再版で削除のも

のには印を付け、末に再版で追加されたものを続ける方式をとらなかったのは、もっぱら右の判断に出ることであって、特に異を立てる意図に出るものではない。もっとも、原著の再版がバークリ自身の眼がとおった（そして、なによりも巻頭に著者名が入った）いわば箱書き付きのものであることを考えていないといえば嘘になる。[8]

（1） cf. McCulloch, J. R. "*The Literature of Political Economy*" London, 1845, p. 353.

（2） cf. Edgeworth, F. Y., "Berkeley", in Higgs, H. (ed.) *Palgrave's Dictionary of Political Economy*, London, 1925, vol. 1, pp. 134 f.

（3） cf. *The Concise Dictionary of National Biography*, London, 1906, vol. 1. p. 94.

（4） cf. Schumpeter. J. A., *History of Economic Analysis*, New York, 1954, p. 294.

（5） 川村・肥前訳『バークリ・問いただす人』解説、一ページ参照。

（6） 前掲書、解説、一〇ページ参照。

（7） Fraser, A. C. (ed.) "*The Works of George Berkeley*" London, 1901, vol. IV, pp. 415 ff. のことである。

（8） だから、邦訳版の訳者がいうように、主として国立銀行設立案に関する削除部分が視野から除かれる。けれども、これはバークリが行った削除である。一七五〇年に彼が、国立銀行については、もっと機が熟してから、論じても良いだろうとして削除を行ったのであるから、晩年の（バークリは一七五三年に歿している）彼には、本稿の方式のほうが忠実なことになる。

なお、邦訳は十分に利用させて貰った。一々邦訳版のページを記さないのは読者の（あるいは印刷者の）煩労を避けるためである。邦訳版は巻末に初・二版対照表を付しているので、読者は容易に本稿への引用個所を邦訳本で確めることができる。訳者川村・肥前両氏にあらかじめお礼申上げておく。

二　整理された断片（一）—貨幣と信用—

『ザ・キエリスト』が、一年に一部ずつ公けにされ、一七三五年から足かけ三年の後に三部作をなすにいたったことは既に述べた。匿名の初版である。三部が揃ったとき、その総項目数は八九五であった。だが、後に一七五〇年に著者名入りで通し番号が付けられ、全一冊となった第二版では、それは五九五項目になっていた。補足もあったが削除の方が多く、この結果となったものだが、つまりは三三・五パーセントの項目数減である。国立銀行設立についての項目の削除が多いとされているが、とにかく著者が自身で当時の状況を考えあわせ、重複を中心に整理したと考えたほうが良いだろう。少なくとも、バークリの一七五〇年におけるまとめがこの項目数となったのである。で、前節末尾の方針に従って、第二版の五九五項目から、貨幣・信用・銀行などに明らかに関連すると思われる項目を拾ってみたところ（恣意的判断によるので、絶対正しいと言う主張はできないが）、約一五五項目となった。要するに、第二版のうち略々二六パーセントが右の主題に直接に関わっていると見えたのである。少いとは言えない。

ところが、この一五五項目は全体の中にばら撒かれ、その全体は詳さに見ると、叙述の順序が混雑を極め、何やら尻取りのよう、あるいは思い付きの羅列のようになっている。それに同一趣旨の言説が重出していることもしばしばである。であるから斜めに読下すぶんには、随分説得力があるように見えるのだが、筋立てて理解しようとすると右のような次第でまことに難渋する。それで、述べられている個所に頓着なく、バークリの頭の中に混沌としていた諸要素を、私が組上げたとしたらという心組みで整理再構成してみた。つまりは、バークリの言

葉を利用してはいるが、いわば私の独断と偏見による改悪である。だが、以下しばらくは、読者の寛容と忍耐を期待するほかはない。[1]

さて、バークリは経済時論家として『ザ・キエリスト』を書いた。胸中に蟠っていたのはなによりもアイルランドの経済状況の改善であったろう。それを貨幣問題に限って一言でいうなら、アイルランドには支払手段の不足が著しい。このため産業が発展しない（二四〇）。この国には金鉱もなければ自由貿易もないのだから、正貨を輸出することには、いつにしても、むろん賛成できない（四九三）。だがともあれ、現にこの国の貨幣はイングランドよりも少ない（四九六、四九七、五〇四）のだから、なによりも国立銀行を作るべきだ（二二二、二二三、二八八、二八九、五八八）。また造幣所も設けなくてはいけない（九四、五七三、五七四、五七五）。そして、造幣所では小銭を作るようにすべきである（四八五）。造幣所を作ってもイングランドの害にはならないし（五七四）、国立銀行の設立はむしろイングランドの利益になるであろう（四三四、四三七）。というのがバークリの結論であり、提言であった。[2] なぜ、こういう結論になるのか、以下説明していこう。

貨幣はすべての人が熱心に追求しているものだが、その使用の目的ないし本質は十分に理解されていない（二七八）。しかし、その本来の有用性はひとの勤勉を鼓舞し、流通循環して他人の労働の成果に與らせることにある（五、四七二、五六七）。従って、産業を伴わない貨幣獲得は無意味で、それの無制限な獲得を自己目的とすることは正しくない（三〇五、三〇六）。貨幣があるから分業がおこり産業が発展するのであって、貨幣の不足は国家を痛風にする（四一五、四二四）。だから、適切な流通手段なしに、繁栄する製造業者や繁忙な国民を期待することはのぞむべくもない（四八一）。[3]

こうした働きをする貨幣の本質は、他人の勤勉を支配する力をもった計算単位であることにあり、各種の貨幣は単位を計算し、記録し譲渡するための切符、あるいは計算用具としてあるのである（二五、三五、四四一）[4]。アリストテレスが、貨幣はとるに足りないものに見えると言っているのは、ヤミクモに貨幣を目的として追求することの愚を衝いているのである（二七九、三〇八、三一〇）。従って、実態に応わしい適正量が存在することになるが、その貨幣量は抽象的な単位の量にほかならない（四六五）。だから、各種貨幣の名目価値を一様に高めることは何の効果もない（二七、一二八）[5]。

であるので、貨幣そのものは、素材のいかんを問わず富ではない。また、富の源泉は土地ではなく、銀でもない。それは人間の勤勉である。だから、賭事に据り込むのなどは論外である（三五、三八、四四、二四九）。とまれ、貨幣の素材が銀でも紙でも、素材が問題ではないのであって（一三九、五九〇）、たとえ地金がなくても産業は進展する（二六、三四）。この意味で銀行券もまた貨幣とみなしうる（三三三）。事実、貨幣の形体は、商品→金属→鋳貨と変わり、最大の進歩を示すものとして紙幣があらわれている（四四五）[6]。

もっとも、貨幣量、すなわち貨幣単位数の増減は物価の騰落を導く（四六五）。ただし、速かに流通するより少い貨幣は、緩かに流通するより多い貨幣に相当する（二二）。とにかく、貨幣を国内にとどめることだけを究極目標にするのはわからず屋である（五五九）。だから、死蔵されている一ポンドより、流通している一シリングの方が、公衆にもたらす利益は大きいし、また二度支払われる六ペンスは、一度支払われる一シリングに等しい働きをする（四七七、四七八）[7]。このことから更に、流通速度の大きな小額貨幣の方が、流通速度の小さい大額貨幣よりも、大衆の利用には適していると言えよう（四七六）[8]。

分業が信用を必要とし、信用は協定によって特定の信用用具を生んだ（四七）。従って、例えば、アメリカにおける信用の基礎が勤勉であったように（二五〇）、一国の信用の基礎は産業〔あるいは勤勉〕にあり、一国の富と勤勉と信用の流通との間には比例関係があるだろう（二一、三一、三二、二三二、二四九、二五〇、五八三）。信用はどのような媒介物によっても流通させられる（四二六）のであるから、手形で支払いが行われることも不思議ではない（四九四）。じっさい、信用はイングランドにおける国債のように、金鉱にひとしい働きをすることがあるから、信用を減少させる方策はとるべきではない（二三三）。[9]

（1）文の切れ目に（　）に入れてある数字は、原著第二版の項目番号である。また、本節の注(2)以下は、堀家のバークリの言説に対するコメントである。

（2）まずはインフレーショニスト・バークリの登場である。ただし、彼が国民のインダストリを根本においた産業振興を全篇の基調としていることは（本稿では表面に出しては触れないが）無視されてはならない。

（3）貨幣の基本機能を支払手段にもとめ、貨幣と分業の関係を説くのは、アダム・スミスを想い出させる。

（4）計算貨幣と現実貨幣との関係を、宛かもケインズ『貨幣論』のようにとらえている点に注目したい。今日的に言えば抽象学説的本質論である。

（5）実態にふさわしい適正貨幣量と断ることで、単純なインフレーショニストではないことを示している。現実貨幣一単位があらわす貨幣単位数を変更しても、無意味だとするのは、昨今のデノミ論義を思い出させる。

（6）完全な名目主義。そして貨幣形態の変化を、むしろ今日的に捉えている。工業未発達のため交易条件が悪く、金鉱もないアイルランドであるため、こうなったものか。バークリが、解釈にもよろうが、金属貨幣重視ではないことだけをみても、重商主義者として一概には片付けられないであろう。

（7）貨幣数量説だが、流通速度を意識したそれである。

（8）このことは、後段で小額貨幣増加を勧奨することに繋る。

（9）信用の必然性を、それゆえ貨幣発生の根拠を分業に求めた点に注意せよ。ただし、信用と貨幣の関係については明確ではない。ある場合には信用は、信用貨幣（銀行券など）と同様に用いられている。

三　整理された断片（二）—金銀・紙幣・銀行—

バークリの貨幣（ないし素材）は、金銀と紙幣からなっていた。そこで、この二種を個別に見ることになる。

ところで金銀は計算用具であり、鋳貨は切符であった（四〇、四七五）。だから、金銀の大いさで国富は測れず、一国の富にとって金銀は不要である（一一四、五六二）。一般にひとが想像するほどには金銀の保有が国民の富にとって必要でないことは、アメリカ植民地の場合を見ても解るだろう（四四九）。じっさい、金銀は交易とは関係がないのであって、論理的には一オンスの保有も不要である（四五〇）。だから、金銀への偏愛は国民の富に対する判断に悪影響をおよぼす（四三九、五三一、五四八）。

富の真の基礎はひとびとの数と勤勉と節約にある（二一七）のに、誤って金銀が死蔵されている（四五）。これが多すぎれば、インフレがおこる（二八七）許りでなく、多いものが高価となれば、ひとびとに怠惰の気を生じさせる。それはスペインの例で解るであろう（四五、四七一）。インフレが起るのは、産業の循環の必要をこえて金銀が持たれるからである（二八一、二八二）。このように多いばかりが良いのではないから、仮に豊富な金鉱が国内で発見されても、ほんとうに利益をもたらすばかりとは考えられない（二八三）。なぜなら、金銀が勤勉を助長

しないときには毒薬となるからである（五六三、五六四、五六五、五六六）。金を受取った国がつぎつぎと滅亡した例は多い（五六九）。

金銀は国を富ませるものではなく、国を富ませるのは勤勉であるから（五六〇）、この国が金銀を輸出するのに賛成はできないが（四九三、五六一）、かと言って貿易相手国から金銀のみを入手しようとするのは愚かである（五五七）。また、実現できるとも思えない。オレンジ公が一〇日間以上も努力して、二万ポンドの正貨を集められなかったことをおもうが良い（四二八）。ともあれ、金銀の獲得保有に熱中するのは正しくないのだから、国内商業の振興は金銀を増さないからという理由で、これを富国の策たりえないとするのは誤っている（五四一）。

ところで、あらゆる鋳貨についての規制は産業振興のためにある（四六〇）。この点から金貨と銀貨を比較してみると、金貨と銀貨とは流通速度が異るから、同額を増加するのなら、これを銀貨で、ことに小額銀貨で増加することの方が、産業に与える効果は大きい（四六四、四六八、四六九）。じっさい、金貨による取引の度数は減少してきているらしい（四七〇）。[1]

このように、金銀および金銀貨の増加にあまり好意的でないバークリは、紙幣については逆である。すなわち、次のように言う。

キリスト教世界の中で最も富裕な国々の富は、金銀よりは遙かに紙幣と両立する（四二七）。紙幣は鋳貨よりも、支払において迅速、輸送・保存に容易、また紛失のとき取戻すのに支障が少ないだけでなく、アイルランドには鋳貨が不足しているので、紙幣の流通が必要である（二二六、二二七）。現にニュー・イングランドでは、紙幣の不足からすべての取引が沈滞している（二四〇）。紙幣は印章や署名によって国内的に通用する価値をもち、

金貨よりも大量の流通に適している（四四〇）のであるから、紙幣を利用すべきである。たしかに、紙幣を含めた貨幣一般の過剰は有益であるよりも、有害である（三一三）。近年ヨーロッパで紙幣について見られた悪い結果は、それを発行する銀行の株式の応募、割当、配当、仲介売買などに関して生じた（二四六）。要するに、投機が悪いのである。けれども、こうした弊害は容易に防止できる（二一九）。すなわち、正直で、節約的な規制の下に紙幣を作れば良いのである（二八八）。[2] 過去の事例によれば、紙幣に関する規則や制約を守らなかったために不都合を招いたことはある。しかし、金銀貨をもっていた時よりもより繁栄したのであった（二五三）。

紙幣は銀行が発行する。その銀行の働きは何か、といったところからバークリは始める。すなわち、

さっと一筆書けば、個人が一〇〇ポンドを生み出せるといったことが、中小商工業を停滞から救う（二九〇）。これが銀行の利益である。だから銀行は産業を繁栄させ、循環を振起する。つまり国の財宝を増加させるのとひとしい働きをするのである（二二八）。むろん、紙幣や信用を濫用してはいけない。ミシシッピー計画や南海計画の結果から、銀行を悪く言う者があるが、これらは産業の推進援助のためでなく、怠惰と賭博の手段として、紙幣や信用を利用したからである（二二九）。先例として、アムステルダム銀行の成功があげられよう（二三〇）。[3]

それゆえ、公共の財宝、力、英知のすべてが働けば、信用銀行は全人民の目的にこたえ、欠乏を救い、躊躇を消す土台となりうる（四三二）。その基礎としては、土地と紙幣（どちらも輸出できない）が適当であろう（二四三、三一六）。だが、これまで、私的利益のために公衆を犠牲にする身勝手が、多くの不都合を招いた。たとえば土地の過大評価といったことがその例である（二四七）。[4] であるから、公的銀行と私的銀行といずれが良いかとなると、公的銀行のほうがすぐれている。公的銀行は公的信用による制限された価値の銀行券を流通させるのに、私

的銀行は私的信用により無制限に銀行券を流通させるからである（四二九）。公的銀行に対してなら、独占と機能の過大化を理由とする反対論はあてはまらない（二四五）。それに公的銀行は、私的銀行よりも銀行券のより広い流通範囲をもつことができる（二二五）[5]。

（1）バークリは金銀価値の引上げ（つまり、今日の平価切下）の効果についても述べている。これを、金銀の必要量を減らし、より多量の金銀を国内にもたらすのではなく、逆の効果を生む（四六二）としているのは興味深い。従って逆に金価値の引下げは、国内に発熱（つまり、インフレ）を呼ぶことになるのであった（四六三）。国際貿易を考えずに、金銀の国際移動を、必要貨幣単位数と金銀量との関係だけから考察しているからであろう。

（2）しかし、いかにしてそうした規制を行い、過剰発行を抑制できるかについては、より具体的には何も述べていない。今日、諸国における（ヒックス流にいう）労働本位制流行の状況を見ると、これだけの言い放しでは歯止めを欠くように考える。

（3）バークリの脳裡に、当時から一三〇年前に設立されていたアムステルダム銀行の成功（二九三、二九五）が強く印象づけられていたことは疑いない。彼によれば、経済的に弱少だったオランダが急速に発展したのは、アムステルダム銀行のためで、この銀行はアムステルダム市が支払能力以上の負債をもったことから始った（三〇〇、三〇一）のだが、この銀行はわれわれの教訓になる（二三〇）。アムステルダム銀行の保有貨幣は死蔵されている（二四二）からであるといって、その業務を詳しく述べている（二九四、二九六、二九七、二九八）。

（4）土地銀行をバークリが考えていたというのは、この辺の言説から出ているのであろう。

（5）しかしバークリは、今日のような積極的赤字財政の可能性は考えていなかったようである。

四　整理された断片（三）―国立銀行・造幣所・小額貨幣―

だから、国立銀行を設立すべきだということになるのだが、バークリは国立銀行について次のように言っている。すなわち、

国立銀行は、ヴェニスが最古のもので、アムステルダム、ハンブルグにもあり、国家の支配の下で成功しており、国を支える柱になっている（二二〇、二九一、二九二）。これらをみれば、国立銀行設立の利益がよく解る。それらは国家の資金により支持され、議会により保証されている（二二二、二二三）。

国立銀行の業務は、信用の範囲を拡張し、紙幣を流通させ、抵当を受取り、土地を売買し、為替手形を扱うことである（二四四）。これによって、国立銀行が貨幣の支払をすることは極めて稀となり、正貨を持つ人がすすんでこれを紙幣にかえ、銀行の出納管理者として振舞うようになる（四四一）[1]。そして、このような国立銀行の活動によって、国民の貨幣不足に対する苦情はなくなり（四二五）、工業からの貨幣への要求は充たされ（四一六）、より広い土地が耕され、より多くの人が就労し、多量の商品が輸出されるようになる（四六七）。つまり、国立銀行は国家のもつ真の「賢者の石」とも言うべきものである（四五九）[2]。だから、国立銀行は商工業に資金を供給し、交換を調節し、取引を促進し、ひとびとに進取の精神を注入するのに有益で、これがあれば、われわれの財産は護られ、高利貸付はなくなり、商業は円滑化し、鋳貨の不足が解消する（二七七、三二五）。従って、国立銀行は金鉱よりも有益なものである（二八九）。

国立銀行は産業の振興を目標として運営されるが（三一四）、その保証は国全体の富にほかならない[3]（四三八）

から、わが国の勤勉を増大させ、富を増加させるにつれて、母国イギリスにも利益を、それと比例的に与えることになるだろう（四三七）。

次に、そして最後に、ジョージ・バークリは、小額貨幣の供給と造幣所の設立について述べることになる。すなわち、

アイルランドに造幣所を設けるべきである。かつてナポリやシシリアがスペインやオーストリアの属領であった頃、それらは造幣所をもっていた。だから、アイルランドがそうしても、大ブリテンにとって不都合にはならないだろう（九四）。そして、その造幣所ではもっぱら、一シリング貨、六ペンス貨、ならびに銅貨といった小額鋳貨を製造するものとする（四八五）。なぜなら、アイルランドにとって多量の小額現金、なかんづく銅貨が絶対に必要だからである（一三一、五八八）。で、小額鋳貨について考察することとする。

アイルランドにおいて小額銀貨の発行高を増加させれば、[4] 商業の車輪に油を注すことになる（四六一）。というのは、現金の主な効用は手から手に速かにわたることであるが、銀貨と小額貨幣はもっとも流通速度が早い（四六八、四七三）からである。もともとアイルランドは、極貧の民がみち溢れた貧しい国である（五七一）から、市や市場で小銭が欠乏するときには取引が円滑に運ばなくなる（四七四）。小額鋳貨が大衆の利用に結びついている（四七六）ため、大衆の勤勉を生かすには、小額貨幣が不可欠なのである（四八七）。だから、小額現金はアイルランドに活気をつけるが、大額の現金の利用は却って停滞を招くことになる（四八一）。

たしかに小額鋳貨の使用による磨損は大きい。けれども、その有用性とくらべれば損失は到底問題にならないくらいに小さい（四八六）。であるから、アイルランドが土地を牧羊地としてだけ利用しているような活気のない

状態から、大ブリテンと競合しない製造業にひとびとを働かせるようにするためには、小額貨幣の欠乏を取除くべきである（四八八、四八九）[5]。

（1）これらの諸活動は、土地の売買を除いては、今日の商業銀行が、預金の受払と振替によって行うところと全く同じである。だから、公的銀行にしかできないものではない。なぜ、バークリが私的ではなく、公的銀行に執着するのか。当時の状況から、理由を探り出すことが必要となるだろう。

（2）賢者の石→錬金術における最高のもの。他の金属を金や銀に変えるのに役立つ物質。

（3）国立銀行の保証は国全体の富というときの、その富の実体内容は何かを考える。金銀でないことは明らかだが、国民の勤勉でもない。勤勉は富の源泉であって、富そのものではなかった。強いて言えば土地かとなるが、土地のみではないだろう。結局は、今日の日本銀行におけるように、その貸借対照表に資産として計上されるすべて、となるのであるらしい。

（4）フレーザー版では、この四六一は、

Whether to oil the wheels of commerce be not a common benefit? And whether this be not done by *avoiding fractions* and multiplying small silver?（イタリックは堀家）

となっている。問題は、イタリック部分の avoiding fractions だが、川村・肥前の邦訳書のように「端数を生むことを避け」（同上書、二二五ページ）というのでは、意味が不明になる。第二版で削除された、この直前の項（Ⅲ・一四一）は Whether the *North* and the *South* have not, in truth, one and the same Interest in this Matter? というのである。疑うらくは、この項を受けて四六一では、avoiding fractions となったものだろう。従ってここは、「（アイルランドの南北の）分割を避けて」というのが正しいのではなかろうか。読者の示教を得た

い。なお、本稿本文では、全体の行論には関係がないので、この fractions には触れていない。

(5) このパラグラフと、その直前のパラグラフでは、小額貨幣のことをいろいろに表わしている。これらは、原書の用語と次のように対応する。すなわち、

small cash：小額現金　small silver：小額銀貨　small money：小額貨幣　change：小銭

small coin：小額鋳貨

もっとも、バークリがどのようにこれらを使い分けていたかは不明の侭にこうしたに過ぎない。却って混乱したかとも思うが、後日のためにとりあえずこうしておく。

おわりに

かなり独断的に、私なりの整理によって、貨幣に関するバークリ『ザ・キエリスト』の所説を整理してきた。見るとおりのものであって、当時としては斬新なものであった。のこった問題は、なぜバークリが具体的な提案として、国立銀行の設立と小額鋳貨の製造を言わねばならなかったかである。バークリはむしろ哲学者であって経済時論家としての業績はほとんどない。このことは本稿のはじめにも記したが、それがいわばなぜ埒外へ踏出したかが問われるべきであろう。

いまのところはっきり推測できる事情が、一つ二つはある。第一に、バークリがイングランドからアイルランドへ帰ってきたのは『ザ・キエリスト』第一部の出版の三年前であり、しかも帰ってきたアイルランドは、彼が三十年近くも離れていた所である。青少年時代の状況と現状とを見較べ、また、身をもって見てきたイングラン

ドをはじめとする外国の発展のありさまに思いを馳せたとき、バークリははっきりと愛国者になった。それは恰度、アダム・スミスが『諸国民の富』の執筆をオクスフォード留学から帰来したのちに、スコットランドの発展を祈って着想した（と、私は思うのだが）のと似た消息である。

第二に、当時のアイルランドでは、じっさいに小銭の払底が甚しかった。これはスウィフトの『呉服商の手紙』（一七二四年）が示唆するような様々の事情や事件を伴ったものであったらしい。直接的にはこの小銭払底が、かなり重要な動因となって『ザ・キエリスト』が書かれた、と私は考える。ところが、何故小銭が足りなくなったかについては、それ以前、大袈裟に言えば一六四一年の大叛乱の前後まで溯らないとどうやら筋道がはっきりしないようである。

本当はこのペーパーは、これらの事情をも盛込んだものにするつもりであったが、情ないことに時間が私を待ってくれない。で、今回はこの辺で擱筆するが、いずれ近い内に、機会をえて、少くとも右の二つのこと（すなわち、バークリの生涯とアイルランドの当時の経済事情）に関して新たに稿を起したいと考えている。

付記。岡田俊平先生には、少年時代からお世話になった。当時、先生は大倉精神文化研究所の所員であられた。年輩でいうと叔父さん位にあたる。このため、なにかにつけていつでも、腹蔵なくご教示いただける心持ちでいるのだが、先生にはさだめてご迷惑なことだろう。日頃のご無礼のお詫びと、いつまでもご健勝でという気持とでこの小論を書いた。なんだか、古稀祝賀会の末席で参会者各位と一緒になって、良い心持ちになっているような気分である。